論説

啓蒙と挙業のあいだ

——伝統中国における知識の階層性——

大澤顯浩

序

旧中国の士人の伝記を調べてみて気づくのは、正史の列伝や碑伝文、年譜でも、祖父に教わったとか外傅に就いたという表現はよくみられるが、幼いときに対句をたちどころに作ったとか、経書を暗誦したとかの神童ぶりを記すことがふつうで、実際に何を教えられたとか読んだとかを具体的に触れることは少ない。よく見えるのは、『詩経』や『書経』、『大学』、『孝経』といった経書の名である。

司馬光「居家雑儀」教男女には、六歳で学び始めて字を書き、七歳で『孝経』・『論語』、八歳で『尚書』を唱えさせ、九歳で『春秋』及び諸史を唱え、講解して意味をわからせる、十歳で外傅について『詩・礼』を読ませ傅が講解して仁義礼智信を知らしめる。女子に対しては、『論語』・『孝経』及び『列女伝』、女戒の類を講解して意味を

教えるという。[1] また、元代の『程氏家塾讀書分年日程』では八歳で入学したのち、『小学』、『大学』、『論語』、『中庸』の順に学ぶことになっている。[2] 同じく、元代の社会を反映する『老吃大』には漢人の学堂で学んだ書物として、『論語』、『孟子』、『小学』が挙げられている。[3] 同様に『朴通事』上にも学校の記事があり、『毛詩』と『尚書』を読み、七言四句の詩を作るとされている。

初等教育の場ではつねにそのような経書しか用いられなかったのかといえば必ずしもそうではない。実際のテキストとして用いられたものとしては、早くは『兎園冊府』や『太公家教』、『開蒙要訓』などがあり、広く華北で用いられたといわれるが、現存するのは敦煌の写本だけである。五代の宰相馮道の例がよく引かれる『兎園冊府』は、初学者の参考書として馮道を皮肉ったことで記されているだけで、実際に子どもの頃に用いたという記載なのではないが（『旧五代史』周書巻一二六、馮道伝）[4]、『新五代史』には「兎園冊者、郷校俚儒教田夫牧子之所誦也」（巻五五、劉岳伝）とあるように、郷村で庶民の子どもに教えるものだったようである。したがって、これらの童蒙書の存在は士人の伝からはまず窺えず、わずかに随筆筆記の類に存在が現れるにすぎない。[5] 孫光憲『北夢瑣言』巻十九には、馮道が丞相となってその風采が士人から笑われていたといって、劉岳と任賛の偶語のエピソードを記し、『兎園冊』は華北の村野で童蒙を教えるのに用いられ、各家に一部あったので人々が粗末に思っていたという。[6] また、王明清『玉照新志』巻三には、世に伝えられる『太公家教』は非常に通俗的な内容で、唐代の田舎の老学者が作ったものであろうと述べ、さらに後の段では『百家姓』にも触れている。[7]

宋代の郷村では農閑期に塾で子どもを教えていたようで、田中謙二「旧支那に於ける児童の学塾生活」（『東方学報』京都第一五冊、一九四六）や陳東原『国史旧聞』巻四八、私塾家塾に紹介されている。[8] 乾道三年春、山陰での作という陸游の詩、観村童戯溪上（『剣南詩稿』巻一）[9] に「三冬暫就儒生学、一隅還従父老耕」の句があり、その

自注に「村人惟冬三月、遣児童入小学」とあり、冬の三ヵ月間塾に通ったことがわかる。同じく『剣南詩稿』巻二五の秋日郊居と題する詩

児童冬学鬧比鄰、據案愚儒卻自珍、授罷村書閉門睡、終年不著面看人

の「冬学、村書」についての自注に「農家十月乃遣子入学、謂之冬学、所読『雑字』・『百家姓』之類、謂之村書」とあり、当時用いられたテキストが知られる。この自注にみえる『雑字』というのは、斉言句を並べた簡単なものではないかと思われる。『雑字』を称するもので早いものには、洪武四年金陵王氏勤有書堂刊『魁本対相四言雑字』(京都大学工学部建築図書室所蔵)があり、「天雲雷雨、日月斗星」といった天地動植物の自然や社会、日用の器物の名前を四つずつ文字に図を配して列挙したものである。これは後世の「方字」や「字塊」と同じで、識字を目的としたことは明らかであろう。他に田中謙二は「天地古今、陰陽始終、歳時日月、春夏秋冬」[10]という斉言句で始まる『雑字』を紹介している。

その後、明末に現れた『増補易知雑字全書』(東京大学東洋文化研究所蔵)や『東園雑字大全』[11]になると日用類書の記事を取り込んで、天文門、地理門をはじめ、訟獄門、釈道門にいたる各門に分類された語彙に加えて、「小児論」(孔子項槖(託)故事)、百家姓郡望、九帰歌訣(掛け算の九九)、孔門弟子、先賢名士類、千字文、警世文さらには手紙の書き方などの様々な雑知識を一冊にまとめたものが現れる。[12]

また清末の直隷の楊村清真初等小学堂では、十人余りの児童が壁に向かって座り、『三字経』『四言雑字』などの書物を読んでいたという。[13]清末の『四言雑字』や『六言雑字』のように図は見えなくなり、

勤倹富貴之本、懶惰貧賤之苗。　三教九流固好、無如耕田為高。

というように、事物の名辞を列挙する単純なものでなく意味のある斉言句を続けるものも残っている。

一　読書の履歴

（一）『乱離見聞録』の世界

明末清初期になると、庶民の自伝ともいうべき回想録が残っており、初等教育についても記すところがある。なかでも陳舜系『乱離見聞録』三巻[14]は、広東省の雷州半島の付け根に当たる呉川県に万暦四十六年（一六一八）に生まれ、康熙十八年六十二歳で死亡した陳舜系の見聞した広東の地方生活を記して興味深い[15]。また、明末清初期の戦乱の中で騰貴した物価の細かな記載も随処に見られる。

『乱離見聞録』のなかで同族の分岐としている洛嶺の陳氏には浙江布政使になった陳珪（広東化州人、嘉靖八年三甲一一〇名）がいるが、自身は書香の家柄とはいえないようで、官職についたこともなかった。家の中にもともと科挙受験に向けた環境があったわけではない。ただ、風水を研究して知県朱弘のもとに書を見に行ったことが記され、知県に出入りすることが可能な家柄であったとはいえる。その中で順治九年正月、化州に靖南王を迎接に行った際に「圧甲当差」の苦を上啓し、「方得照米当差、裁汰買辦供応」がなされたというのは地方の知識人の在り方として注意すべきものであろう。あるいは憚るところがあったのかもしれないが、父が何をしていたのかをはっきり記さないし、崇禎五年三十七歳で亡くなった父を、布政使となった一族の陳珪がその兄を葬った麗山尋至嶺に、崇禎十五年に改葬したことを記す程度である。父亡き後の母についても特には記すところがなく、順治九年に母寧氏が亡くなり、順治十五年十一月に、我母寧孺人[16]を「東海児の獅子嶺に葬る」とある。末尾の光緒六年呉宣崇の跋によると、注を施している次男の陳景廉は順治十七年（一六六〇）の生まれ、字は東海、康熙辛卯（五十年、一七

一一）の挙人になっている。[17]

さて、実際の陳舜系の教育の状況はどうであったかといえば、天啓三年（一六二三）五歳、啓蒙の師につき、崇禎元年（一六二八）十一歳からは、李氏の家塾に学んだ。十五人の学友と三年間学んだという。羅信耀『北京風俗大全』（藤井省三他訳、平凡社、一九八八）にいう専館外附（「小禿児、学校へ行く」一九七頁）で、他家の家塾にいく生徒というものである。何をテキストに用いたかは不明であるが、同窓の呉士望の父鼎泰が進士に合格した（呉鼎泰、広東呉川、崇禎元年三甲一〇三名）とあり、同じ塾に挙人の子どもがいたわけで、私塾とは違って、必ずしも地方の知識レベルの低い塾ではなさそうである。呉鼎泰の郷試合格は万暦己酉三十七年（一六〇九）のこと（光緒『呉川県志』巻六、選挙表、同巻七、人物伝第七葉）。

三年間この塾に通ったが、崇禎五年三月に父が病で亡くなり、役場で書記のようなことを行なう。簡単に役場にもぐりこんでいるようなので、父は胥吏だったのかもしれない。（崇禎七年の記載によると）八月から毎篇銭三文で黄冊を写す仕事をして、昼は書類写しをして夜は勉強をし、さらに算数や星占いを学ぶこと三年とある。受験勉強の書物、『句解字義』や『発蒙文字』を購入し人に教えを請うが得られず、仕方なくさらに『海篇』[18]を買い、科挙の文章を作ろうとするが初歩で苦しみ、表叔の姚太祥（順治歳貢生）などに尋ねて初めて書坊に『程墨直解』、『古文文章軌範』、『袁了凡教子挙業定衡』などの挙業書があることを知ったという程度で、科挙受験の環境が整っていたとはいえない。父が亡くなってすぐに役所で働いていたわけで、家計もそれほど裕福なものではなかった。崇禎七年、十七歳で康氏に入贅する。もともと郭氏と婚約があったが、郭氏が六歳のとき父の郭廷相が早く亡くなり、母の莫氏が康氏に再婚したのに従っていったので、康氏に婿に入った。

『乱離見聞録』に描かれた陳舜系は、碑伝文でよくあるような仕宦の家柄で科挙に向けての文化的蓄積があった

り、父の亡き後も母が厳しく教育を施した家庭とはずいぶん異なった印象がある。黄冊を謄写しながら占いを学ぶというのは、興味の対象であったにせよ、科挙を視野に入れた行動とは思われない。崇禎八年北京を見てみたいと思って里長になって黄冊を運ぶ役に応じたり、北京滞在中の崇禎九年正月に城隍廟に行き、道士に『黄庭経解内外』、『金剛科儀』、『皇極章程』といった宗教書を授けられたり、二月に「三年菜食して父母の恩に報いることを誓う」とあるのは、科挙の功名とは無関係な道を選んだことをうかがわせる。ちょうど、徽州の吏目の程立行を呉鼎元が用いていたので、代々医者を業としていた程立行に医術を教わり、『丹渓心法』、『立齋医案』を見るようにいわれた。[19]

また、北京では呉鼎元から「三考頂帯」[20]を代納するといわれたが固辞して、広西太平府節推に赴任するのに同行を求められるが辞退した。後に任期満了により順慶同知に昇任した呉鼎元から招かれた際にも行かなかったという。科挙受験を初めから諦めていたわけではないだろうが、この頃には官界やその周辺に生活する意欲、援例監生から佐貳官となったり、幕友となる意志もなくなったように見える。

崇禎十年、十九歳、蘆用克に入門し『先天軌策二数』と『堪輿要略』を授けられ、暦法や風水を教わる。耕稼の暇に書を読むが思うに任せない。正しい道を学ばなければ術を身につけても私利に流れてしまうと考え、きちんと道家を学んで冥福に役立てようと考えて学道の想いを興す。崇禎十一年六月十九日、江都の孔和光に入門して、心性の意味と仏老の道を手ほどきされた。「三教の外百家の技芸は何が比較して有益なのでしょうか」と尋ねたところ、孔のいうには、「医道は仙道に通じていて、生命を養って長生きできるし人を救うこともできる。次は風水家で最も禍福に関わっている。この外の諸技術はみな職人にすぎない」とのことで、医術と鍼灸を学んだ。さらに風水を習って、知県の朱蘭谷（名は弘）の集めた『一貫堪輿』及び『地理家伝』・『人子須知』・『琢玉斧』・『天機会元』・

『人天指掌』・『地理元機』・『玄珠』の諸書を注意して考究した。[21] 知県の朱弘は光緒『呉川縣志』巻五、職官によると、広西臨桂の挙人で崇禎四年に任じられ名宦に祀られている。風水を研究していたようで『一貫堪輿』は朱弘の著書であったという。[22]

その後、崇禎十三年、二十二歳で黄惟萼の処の家塾の塾師となる。生徒は十数人で、黄惟萼（中華）は先にみえた孔和光に入門した同門であった。十月初めに妻郭氏が亡くなり、翌年二月、「十金」を出して文氏を娶る。物価が騰貴して昼は塾で教え夜は謄録を続ける。この年、塾師としての報酬は米二十石、辦月銭が四千八百銭、住まいや再婚などの諸経費も一切黄惟萼にたよる。同年の記載に「石米銭八百」とあり、年二十石は年十六千銭、銀で十六金から二十金という程度であろうから、辦月銭五、六金を加えれば母親と弟、妻子を養っても必ずしも貧窮の塾師というわけではないだろう。崇禎十五年に父を麗山に改葬したが、弟たちには一切の費用の負担をかけなかったという。これより先、一翁から麗至山に地を送られ、呉鼎元・麦倫が手を執って賀をなすのを夢に見たとあり、麗山は一族の浙江布政使になった陳珪が兄を葬った縁起のよい土地であり、次男の陳景廉の挙人及第を暗示させる。

『乱離見聞録』には陳舜系の直接、間接に見聞きしたことが記されるが、その後は彼自身について具体的に記すことは少なくなり、順治年間以後は南明と清との抗争や三藩の乱など戦乱の記載が多くなる。医術や風水を学んだ陳舜系がふだん何で生計を立てていたかははっきりしない。塾師をつづけていたのか、医師に転じたのか、あるいは兼業していたのかは定かでなく、順治十一年には永暦政権側の安西王李定国の軍に医者としてさらわれたりした経験を記すが、最終的には科挙の功名から降りた感がある。崇禎十一年の陳景廉の按語には「父は生平頗る黄老術を好む」とか、道家のお符も信じていたという記述もある。仏教に対する批判は記されるが、『太上感応篇』の功徳や風水を信じていたことが随処に読み取られ、読書人のイメージとしては全般的に儒教的な要素は少ないかもし

れない。

これに対し、啓蒙教育の段階で用いたテキストを詳しくあげているものに松江府上海の姚廷遴『歴年記』の例があげられる。姚廷遴については、岸本美緒「『歴年記』に見る清初地方社会の生活」に詳しいが、[24] 叔祖に布政使を務めた姚永済があり、明末清初期の名望家の子弟の教育としてとらえることができよう。『歴年記』によると、六歳で『大学』をよみはじめ、九歳で『孟子』、十一歳で『詩経』、十二歳で『四書』、十三歳で文章を作り始め、十六歳にいたるまでに前後八人の師についた。初めから科挙を意識した初等教育といえ、六歳で『大学』を読み始めたのは二弟も同じで、姚家の決まりであったようだ。[25] また、『孟子』を習ったのは医者の子である蔡淡然だが、先生とは記さないのは階層意識が反映されたものといえる。[26] 明末の江西の陳際泰『己吾集』巻八、陳氏三世傳略には、陳際泰の父の言葉として「此の間、小児才（わずか）に『下孟』を讀みて、便ち走りて挙業に従う」と四書の『孟子』下を読み終わればすぐに挙業を事とする状況を記している。

（二）清末民初

清末になるとかなり詳しい自伝の類が現れてテキストについてもいろいろ分かることがある。まず、田中謙二「旧支那に於ける児童の学塾生活」によると、李季は六歳から十二歳まで三人の塾師に師事し、『詩経』と四書全部を暗誦していた（田中所引李季「我的生平」）。また、周作人は六歳から十三歳までに『論語』・『孟子』・『詩経』・『易経』及び『書経』の一部を読了したとある（田中所引周作人「我学国文的経験」）。

陳鶴琴は『百家姓』、『三字経』、『神童詩』、『千家詩』、『唐詩三百首』、『大学』、『中庸』、『論語』、『孟子』、『幼学瓊林』の順に読んだという（『我的半生』六、読什麼書）。胡適が最初に読んだものは父の編纂した『学為人詩』と

いう四言の韻文であった。後に『孝経』、『小学』、『論語』、『孟子』、『大学』、『中庸』、『詩経』、『書経』、『易経』、『礼記』という順序で学んだという（『四十自述』）。また馮友蘭の家は祖父の代には既に学問を修め父の代で進士となったわけで、立派な読書人の家柄といえるが、馮友蘭はまず『三字経』さらに『論語』、続いて『孟子』、最後に『大学』と『中庸』を読み、さらに当時の新学であった地理の読物『地球韵言』を読んだ。[27] 四書を読み終わった後は経書を読むのだが、初めは『詩経』を読むことになっていたという。（『三松堂自序』[28]）

以上のように、旧中国の私塾や家塾での教育には、まず韻文や四書を身につけさせるという原則があることがわかる。『紅楼夢』第九回にも、賈政が宝玉の勉強の進み具合を李貴に尋ねたとき、塾の老先生にご挨拶をして、わしの言うとおりに「まず『四書』だけを暗誦するまでたたきこむことがかんじんだ」ということを伝えろといっている。[29] また、馬叙倫も初めに読んでいたのは四書のようで、十歳で父が亡くなった時に塾で読んでいたのは『孟子』であり、その後『詩経』・『書経』の暗誦をさせられている。一八八五年、湖北省東部の黄州に生まれた熊十力は、まず『三字経』を授けられたが一日で暗誦してしまい、次に四書を授けられたという。[30] このように四書を重視する方向は一九〇四年に定められた「初等小学堂章程」になっても変わらず、第一学年から第五学年までに、『孝経』、『論語』、『大学』、『中庸』、『孟子』、『礼記』という順序で読むことを規定していた。[31]

江蘇省泰州市出身の魯国堯の回想記「落英」は清末民初の読書事情を紹介している。[32] 魯国堯自身は伝統的な意味での読書人の家に生まれたわけではなく、はじめは伝統的な私塾に通い、次いで民国になって現れた近代的な私塾に行き、さらに学制によってつくられた小学校に行ったという経験を記している。

魯国堯の祖父は光緒五年（一八七九）生まれで、鎮で木綿糸の露店を出していた。魯国堯の父親（光緒三十四年、一九〇八年生、字照林）の世代はすべて商売人で、店員か小商いの店をだしている。父親の世代の兄弟六人はみん

な塾に通った後、泰州のきまりどおりに数え年の十五歳で外に弟子入りし、商売を学んで三年間大根飯を食べて奉公をしてからやっと店員になれたという。[33] そして、彼らが塾に学んだ時間は長くないが文化的程度は決して低くなかったという。一九〇八年生まれの魯国堯の父親が塾で使っていた『絵図監本詩経』、『絵図監本書経』の石印本が残されているという。一方で魯国堯は同時に彼の師の世代、一九六二年北京大学で講演した呉晗が、子どもの頃に『左伝』を学んで暗誦しなければならなかったので、『左伝』は今でも暗誦できるといっていたことや、『励耕書屋問学記』で陳垣が十二、三歳までに十三経を読み終わっていたというような学問の方法は自分の世代には見られないとしている。

一九三七年生まれの魯国堯はどうであったかといえば、数え年四、五歳の時に父が自分で字塊をかいて字を教えてくれて、私塾に行く前に百字以上を識っていた。数えの六歳になった正月に父に連れられて儲老先生の私塾に行くことになる。生徒の年齢はばらばらで六歳から十数歳までいて教科書もそれぞれあって初歩では『三字経』から上級では『易経』までさまざまであった。ところが、この老先生の塾で一年ほど過ごすと段梅江先生の私塾に移った。段先生と夫人は高級中学の卒業で、当時の溱潼では大変な知識人だった。二人とも生徒を教えたが、女の人が私塾の先生になるというのは大変な改革だった。先生の奥さんは英語を教えその朗読はとても心地よかった。そこでは体罰もなく、先生はとても丁寧だった。魯国堯はもう二度と『三字経』や『百家姓』、『千字文』を読むことはなく、学んだのは小学の国文や算術の教科書だった。家から少し離れていたので父親は三姐に連れて行かせて、三姐も一緒に同じものを学んだ。一年余りが過ぎて段先生が公立溱潼小学の先生になったので塾は停止になった。段先生に習っていたので魯家の生徒は当時学堂と呼ばれた小学校のそれぞれのレベルに応じたクラスに行くことになったと記している。

魯国堯が学んだ民国三十年頃まで旧来の私塾が残っていたということは、昔ながらの私塾における識字教育が科挙とは別に廃れずに機能していたわけで、実際に民国以前に科挙と無関係な階層に要求された水準や内容には変化せず受け継がれたといってもよいだろう。

(三) 徒弟

経済的な条件によって異なるだろうが、学問を続けずに商売をする場合にもある程度の読み書きが必要なので、魯国堯の父親のように十五歳くらいまでは塾に行くことがある。旧時は十五歳頃に商人や職人に奉公にあがるまでは、余裕があれば私塾に行き、さもなければ家の手伝いをするのが一般的なものだったのだろう。羅信耀『北京風俗大全』には「商売で身を立てる者は、ごく基本的な教育を受けたあと商店などで見習い奉公をした」(一九八頁)とある。実際に、前述の陳鶴琴が子どもの頃、店で祖父の代から働いていた老経理の顧伝忠は十四歳から七十二歳まで働いて郷里に帰った(『我的半生』第一章、我們的祖宗)。

十四、五歳から見習いの仕事に就くというのはよく見られたことのようで、乾隆時代の汪輝祖『双節堂庸訓』巻五、勿慕読書虚名には、

> 故塾中子弟至年十四、五不能力学、即当就其材質授以行業、農工商賈無不可為。諺云三十六行行行出貴人、有味乎其言之也。

といって、塾の生徒で十四、五歳になって学問に向いていなければ、素質に応じて仕事に就かせればよく、農工商賈なんでもあるという。『乱離見聞録』の陳舜系も十五歳頃から黄冊を写す仕事を始めているし、十五歳といえば仕事見習いの修行時代といえるようだ。清初の艾衲居士編『豆棚閑話』第四則、藩伯子破産興家には「徽州俗例、

人到十六歳就要出門做生意」とあり、徽州商人は十六歳で他所に行って商売をするという。明清時代には十六歳が成丁とされており[34]、陳鶴琴の二番目の兄は十六歳になったとき、成人したから塾を開いて生徒に教えることができるといわれたとある[35]。旧中国では読書を続けない限りは、十四、五歳になれば何らかの仕事に就くのが普通で、清節堂の義塾で十四、五歳になると外に出て「学芸（職を身につける）」することになっているのも実社会の状況を反映したものと思われる[36]。その場合『三字経』だけでなく、最終的に四書くらいまで教えられていても不自然ではない。実際、魯国堯の父親は商人となったが私塾で『詩経』と『書経』をテキストにしていたのである。陳鶴琴は杭州に行って商売を覚えるはずであったが、幸運にも中学に行くことができた。父親が亡くなった苦しい家計のもとでそれまで私塾で『百家姓』・『三字経』から始まって四書、『幼学故事瓊林』まで読んだのは、必ずしも読書人たるべく要求されたためでもなかった[37]。七歳年長の二番目の兄陳鶴聞は十二歳で四書五経をすべて読みおえ、十三歳で県試に合格した読書人の卵というべき存在であり、陳鶴琴の読書の履歴とは明らかな違いがある。

王振忠は徽州の社会生活を反映した啓蒙書『日平常』の記載を引いて、明清以来、徽州では各家庭や個人でも支出や売り上げ帳簿を記す習慣があったといい、書（識字）算（計算）は徽州の男子はほとんどみな誰でも身につけなければならない技能となっていたという[38]。同じく王振忠の引用する『鶴年家書摘録』（清末歙県南郷蔡塢里刊本）には、十歳で学問を始めてから十六歳になってますます学問への興味をおぼえたが商売のために蘇州にあって志を果たせなかったという作者に対して、親戚または友人と思われる二人の人物が「能写帳目、書信就可行」といってたしなめたという話がある[39]。当時の観念でも、学問を修めることとは別に、商人にとっては帳簿を記し手紙を書ければよいということであるが、識字能力の必要性ははっきりとしている。

浙江出身の蔡元培の家は商家であったが、祖父廷楨（字佳木）は質屋を業とし、父宝煜（字曜山）は銭荘の経理

であった。蔡氏の祖先は明末に諸暨から山陰に移り造林をして薪を売っていたという。高祖の代には絹織物を広州に運んで売り、大いに利益をあげていたが、商税逃れで曾祖父の兄が捕らえられ死刑にされそうになったので救うために家産が傾いた。刑を免れることはできたが家は没落した。祖父が質屋で修行して経理にまでなり、たくわえができて祖先のための祭田を購入し、子孫のために土地を買って家を造り、小康の家庭となるを得たという。

当時入門した子どもには、『詩経』を読みおわったら四書を読むというのと、まず『三字経』、『百家姓』、『千字文』、『神童詩』、『千家詩』などを読んで四書をよむという二つのコースがあり、同治十一年（一八七二）、蔡元培が六歳で初めて家塾に入ったときの周先生は後者のコースをとった（『蔡元培文集』自伝、錦繡出版、一九九五）が、これが商家の徒弟むけの手習いのコースにあたるのではないだろうか。その後、六番目の叔父、父の兄弟では唯一の読書人で挙人となった銘恩が『史記』、『漢書』、『困学紀聞』、『文史通義』などいろいろな書を貸してくれ、鶴卿という字をつけてくれた。胡適『四十自述』にも同じ家塾に学ぶ一歳年下の子どもが「糜（胡適の幼名は嗣糜といった）、這信上第一句『父親大人膝下』是什麼意思？」と尋ねたという記載があり、実質的には家塾では字は要らなかったようだ。

（四）義塾

商家の徒弟むけに学問の課程を設定するものは他にも見られる。一族の子弟を教育するために宗族が設けた義塾が発達していた中国では、それぞれの族規に就学に関する規定をもっている場合もあった。費成康主編『中国的家法族規』は、その中で様々な族規を紹介している。例えば、元末明初期の『鄭氏規範』には、十六歳で冠礼をおこなう条件として最低限「四書一経」、即ち四書と経一つ（『孝経』？）を理解していなければならないと規定する一

条があり、[40]後の家法にも影響を与えている。また、『朱氏奉先公家規』には、具体的に『孝経』、『論語』が冠礼の条件に挙げられている。

一、冠礼、年十六以上、能通『孝経』、『論語』、粗知礼儀之方、然後行之。儀礼悉依『家礼』。

同様に、『南外天源趙氏族譜』[41]には、「自八歳小学、十二歳出就外傅、十六歳入太学、当延明師教誨。」といい、

子弟年十六以上、須能暗記四書一経正文、講説大義、粗知礼義之方、然後為之冠。

という規定が存在した。これらの族規が概ね共通して求めるものは明清時期の自伝などに描かれた姿と同様に四書であるといえよう。いわば、四書は義塾における最低限の規準のようなもので、かりにも義塾を置くような家柄であれば、科挙にすすむのでなくとも四書くらいは一族みんなが知っていなければならないものだったということである。

同治十一年（一八七二）につくられた鎮海の方氏の義塾には、識字段階から経書の講解に至るまで詳しい規程が存在している。[42]その中では、商業に就くものは経を修めずともよく、四書の他には『孝経』、朱子『小学』、『幼学瓊林』などを読まなければならないとして、五経を修めるものとコースの設定が異なっている。つまり、義塾で想定されているのは必ずしも全員が科挙を目指すのではないということである。『孝経』、朱子『小学』はこの義塾では初学者のものに設定されており、『幼学瓊林』は、馮友蘭の表現によれば、典故を覚えるために必要とされたものである。また別に、毎日『論語』や『孟子』を一、二章ずつ、あるいは『小学』や『幼学瓊林』を数行ずつ年長者が講解し、次には『日記故事』を読むのもよいとしている。また、光緒十六年の『安陽馬氏祠堂条規』祠堂小学塾規には、まず『三字経』、『二語摘読』、『弟子規』、『朱柏廬治家格言』、『四字鑒略』、『小学集解』の六種の啓蒙書を読んでから四書を読むことになっていた（『中国的家法族規』八八頁）。

さらに、いささか特殊な例ではあろうが先に挙げた余治『得一録』巻十[43]の記す清節堂においた義学の規定では（巻十之三、「義学章程」塾中条例）

一、塾中先備小学七種。一、『三字経』、一、『感応篇』、一、『陰隲文』、一、『覚世経』、一、『文昌孝経』、一、『朱柏廬家訓』、一、『呂子小児語』。此七種皆醇正訓戒善書、可先令生徒熟読之、畢後方令読四子書。毎読一種、即為明白講解。切不可以其童蒙而忽之。

一、『日記故事』最為啓蒙善本、務須毎日講説一、二条、使之覆講。近時又有『学堂日記』、『学堂講語』等書。皆孝子悌弟善悪果報故事、均宜日與講解、俾知修身佩服。

などとなっており、まず『三字経』を読み、『太上感応篇』や『陰隲文』といった善書を学んだ後に四書を読むことが定められていたこと、そして『日記故事』が啓蒙書として推奨されていたことがわかる。[44]そして、義塾ではとくに優秀なできのよい子どもに対し科挙に向けた援助を与えることも定められていた。蘇州や安徽、上海の清節堂の義塾から生員となったものもいる。[45]杭州の善挙連合体に属する義塾には、普済堂と同善堂の管轄する二つの正蒙義塾と宗文義塾という三つの塾があり、丁丙『楽善録』巻八、表伝によれば、同治四年（一八六五）から光緒二十四年（一八九八）までの期間に、合計で生員が四三一名、挙人七名と進士一名を輩出しているという。[46]先に挙げた馬叙倫が、光緒二十四年頃に宗文義塾に住み込みで学んで試帖詩を作ったりしたとあるが、学生の程度は文章を一杯詰め込んでいたものから、ただ暗誦と対句作りだけのものまで様々だった。[47]

また、『得一録』巻十之四に挙げる道光己酉嶺南呉氏の引言がある「粤東議設啓蒙義学規則」には、先に解りやすい書を読んで塾師が講解するべきだといって、まず『新刻続神童詩』を読み、次に『続千家詩』、『感応篇』、『陰隲文』、『文昌孝経節本』、『覚世経』、『朱子治家格言』にすすみ、読みおえて後にはじめて四子書を読む。毎月の三、

六、九の日の午後には、『学堂日記』一、二条を講解することにする。この塾はただ貧寒の子弟が人と為る道理を知らせるために設けるのであり、そのために、この章程は未だ挙業は想定していない。もし優れた資質があれば特別に養成するべきであるとしている。つまり、挙業にまで及ばなくとも四書は啓蒙教育の対象なのであり、家塾の規定と同様に最低限の規準として存在していたといえる。

実際に家塾のテキストとして用いられたものから現実に何が重視されたかが窺える。咸豊丙辰（一八五六）「粤省天平街青雲楼発兌／順徳霞石何氏梓行」（封面）という『四子書』線装六冊には道光七年の順徳何瑞熊の巻末識語があるが[48]、そこには「入徳の門は、首めに四書を重ず」と家塾の教育としてまず四書が重視されていたこと、手に入る範囲でも坊刻本が十数種流布していたことがわかる。黄紙の封面に「咸豊丙辰重校宋本」「粤省天平街青雲楼發兌」とあり広州の書坊で売り出されたものであるが、何氏家塾本ということが売りになったようで、同じく封面には「順徳霞石何氏梓行」、版心には「何氏蔵板」とあり、また「順徳霞石何氏家塾讀本」という印記が巻末に彫り込まれている。木記にも「自維謝陋、不敢示人、刊蔵家塾」とあるように、たまたま二次的、三次的な版行がなされて流布することはあったかもしれないが、もともと家塾本はさほど広範囲に流布することを意図したものとは思われない。序の中で「坊行善本十有餘家」というのは、受験参考書という性格から見ても、版本の善悪に無頓着で近辺の坊刻本で好しとするものの存在の多さを表すものであろう。

二　啓蒙と挙業のあいだ

（一）　読書環境

陳舜系は他家の家塾で初歩的な教育は受けたが、父が亡くなったことにより順調に科挙には進めなかった。『海篇』を買って自学しようとしたが、やはり科挙対策は独学では不可能で身につけられない。汪輝祖の自筆年譜『病榻夢痕録』によれば、十八歳の時、継母王氏の舅の処で子七人を教えて得た「館脩十二緡」のうち三緡で策文を学ぶとあり、策文を学ぶのに特別に三緡を出していたことがわかる（汪輝祖『病榻夢痕録』乾隆十二年）。また、『問俗録』巻二、古田県、三餐には

民間私塾、民間総角授書、終年修金四百文、至成童作文、多不過二、三千。如有出脩金二、三十千専教読者、士林莫不羨慕曰、「某館運大行、本年修金若干、坐食三餐矣。」

とあり、ここで区別されている年に四百文という「総角授書」が識字教育のレベルで、「成童作文」二、三千（二、三両）というのが科挙対策の作文ということができるのではないだろうか。年に二、三十千（二、三十両）を受け取って家庭教師になるというのも、概ね金額的にも他の史料と符合する。呉昌熾『客窓閑話』続集巻一、李蒙師には、

吾郷李生応童子試、年至不惑、不得入泮、遂以訓蒙為業。郷農延之、歳入脩廿余緡。[49]

とあるのは、四十歳を越えて生員になれなかった読書人が子どもに教えることを業とするようになり、年に二十余緡で郷農に招かれたと記している。また清末の朱徳の兄弟三人は、年八百文（老大）と二百文ずつ（老二、老三）少し離れた老先生の塾に入学したという。[50]

中小の商人の家庭では本質的には科挙を目指す環境を整えることが難しく、商途に就くものは四書のレベルで充分で、いくら優秀でも初めから科挙を目指さないのであれば、塾では四書のレベルである。質屋の主人としての商取引や記帳にはそれで充分なのであろう。ただし、その上の科挙を目指すには族的な結合があれば有利に作用する。

蔡元培が六番目の叔父からいろいろな書物をみせてもらったのは科挙への刺激になったと思われる。一族の中で科挙に見込みがあるものがあって援助をすることは、その環境を整えることといえる。ことに徽州商人の場合は、族的な社会が色濃く残っているといえ、親戚をたどれば官僚にゆきあたることが可能である。

それに対して汪輝祖は初めから科挙を目指して学問を強制されている。父の死後、家計が苦しくなっても学問を志向している。清末の魯迅、周作人、徐定超、馬叙倫も同様である。馮友蘭も四書から五経に進むことが予定されていた。

徐定超は道光二十五年（一八四五）生まれ、浙江永嘉楓林の人、光緒九年癸未進士である。曽祖父（名甘芬）、祖父（名思官）は農を業として資産をなす。父（名世英）諱は存智、五人兄弟の四番目で府城に学び三十歳に庠生となった。[51] 父の代から存智というような諱を記していることから、父は農民から資産を築いた祖父の期待を受けて学問を始め、府で学び生員となったといえる。そして、徐定超は、祖父が資産を成してから三代目にあたる。道光二十九年（一八四九）五歳のときに父から『五経章句』を授けられ、数百言の日課を課せられた。

父手抄五経章句授読、超能日誦数百言、深受舅父篤愛。

というように、その父から直接に教を受け、家族の期待を受けて学び、進士となるを得た人物で、やはり科挙を目指した教育を施されたといえる。こういう意味では挙業に向かうには経済的余裕も重要であるが、結果としては家塾に代表されるような広い意味での家庭環境の存在、文化的な素地が重要なのではないだろうか。

万暦四年（一五七六）に江西の田舎で十歳の陳際泰が全相本の『三国演義』を読みふけっていたとして、金文京氏が紹介する『己吾集』巻八、陳氏三世傳略[52]は、やはり下層の知識人の様相を描いて興味深い。陳際泰の父は後に塾師となったが、若い頃は祖父に従って江西から福建の武平に蘇州の布を売りに行っていた。[53] 父にはもともと師が

いなかったが、暇のあるときには五経をなんどもおさらいして独自の解釈を出したという。[54] そして、陳際泰は八歳のとき読むものが無かったので、姨兄の羅汝士のところから角のすり減った『書経』をもってきて、父と同じように読めないところは意を以て解釈したと記している。その後、十四歳になって父に代わって私塾を受け持つようになる。ある日、以前『三国演義』を借りたことのある一族の鍾済川のところから今度は『残唐伝』[55]を借りてきたが、済川は別に『漢書』、『唐書』があるのを知らず『残唐』がそれだと思っていたと記している。祖父に従って布を売りに行っていた陳際泰の父が経書を独自に解釈したのは、いかにも明末的な話題である。また、親戚の鍾済川は自らの文章の程度を「墨巻」と称する識字階層で、白話小説を所有していたが、班固の『漢書』については知らなかった。このような記載を見れば、識字階層といってもその知識に偏りがあることがわかる。

謝肇淛『五雑組』に、塾師の教えるのは『編年節要』、『綱鑑要略』といったもので、『史記』、『漢書』や朱子の『資治通鑑綱目』をあとで読むことができたというのは、[56] 読書環境の影響の大きさを示すものだろう。書香の家柄では、システマチックに挙業に向かわせるのに家塾の存在は重要であろう。しかし一方では知識の偏りを生み出す母胎ともなる。『五雑組』によれば、策論に必要な歴史知識は『通鑑綱目』の節略もので身につければ充分で、原典である『史記』や『漢書』などは読む必要が無かったのである。講史小説を歴史書だと思い込むのが普通だとは考えたくはないが、当時は挙業こそが文字通りの「読書」なのであった。

家塾であれば蔡元培のように叔父から教を受けるチャンスも生まれるし、胡適のように小説を借りたりすることもある。蔡元培は商家の生まれであるが、ちょうど世代的に余裕が出てきて科挙の受験が可能となったころであり、また一族の中で挙人の叔父から適当な刺激を得ることができたのが大きいだろう。

（二）　周辺的読書人

しかし、明末になるとこのような挙業へと導かれる読書環境の意味はそれ以前ほどには重要ではなくなってくるようだ。隆慶年間の援例監生について、黄儒炳『続南雍志』は発社生や附学生、「俊秀」というような名で監生とされたいわゆる民生はみな庶民であるといい[57]、彼らは「文義に通じず」、「書史を知らず」といって批判して以下のように言う。

但教以背書写字、講『孝順事実』并『日記故事』等書、冀令稍加向上、則紛紛以為難堪而托故告出矣。（『続南雍志』巻三、隆慶三年正月乙丑）

ただ書物の暗誦と習字を教わって『孝順事実』や『日記故事』などを説明されただけであり、学問の向上を期待しても難しいという。『孝順事実』となると勅撰の勧善書であるから批判はなしがたいが、基本的には故事を並べただけの書であり、『日記故事』はさらに簡単なただの故事の書として童蒙の読み物とされていた。つまり、ある程度の識字教育を終えれば誰でも読める故事のテキストとして用いられるような内容で、その程度のものは読んでいても文義に通じず、書史を知らずといわれるようなものであった。即ち、一方で広く受け容れられながらも『日記故事』を読むことは、とうていまともな読書人とみなされるようなものではない、という認識である。商人にとっては明末には監生となって資格を得る道が存在していたので、正途を目指さないのであれば、一定の識字教育を身につければ充分だった。とすれば、後の時代に現れる『幼学故事瓊林』のように故事や典故を覚えるためのものとして、『日記故事』が用いられたのではないか。『日記故事』の現存する多くの版本は、明末に多く見られた全相本で通俗的なものであり、教養ある士人からみればかなり劣ったものにみえたであろうという印象は否めない。

『日記故事』はもともと『君臣故事』や『金璧故事』といった故事の書と同様のものであった[58]。故事の書は元明

以来の全相本のものが数種残っている。故事と称するもので古いものには、南宋嘉定五年序刊の楊次山『歴代故事』十二巻（『静嘉堂文庫漢籍分類目録』史部、史鈔類）があるが、これは全相本ではなくやや高級な感がある。[59]

葉盛『水東日記』巻十二、日記故事には、虞韶『小学日記故事』は当時数多く存在した故事の書のなかでも朱子の意を残した優れたものであるといい、「近年、襄城の李公がこの書を重刊し、「生知」をかえて「幼悟」とし、標目をたてて対偶を取り去り、ただ年代で前後を決めることにしたのも善かろう」といって現存しないテキストを記している。[60]

唐順之『荊川先生文集』巻一五、盛孺人墓志銘には、

孺人自少読『小学』・『孝経』、書頗解意旨、故平生喜書、然独不喜仏書。中饋有間、則取『小学日記故事』、稗官小説、家誦説之。

とあり、女性が家庭内で読んでいたことを記す。盛氏は蘇州太倉の人で嘉靖年間の顧存仁の妻であった。その後、萬暦年間になって、巻数を減らし節略された『日記故事』の全相本が広く作られるようになった。現存する各種のテキストについては、橋本草子「『日記故事』の版本について」に詳しい。[61]

時が下って、嘉定の瞿中溶撰『二十四孝考』[62]道光十五年の序に、

世俗有坊刻『日記故事』一書、為郷里塾師與蒙童講説者。前列「二十四孝」、始於虞舜、終於宋之黄山谷、必是南宋以後人所為。

とあり、巻首に「二十四孝」を載せた『日記故事』が、郷里の塾師が蒙童に講説するものであるとはっきり記すように、ある意味で庶民にも親しみのあったものである可能性が高い。そして先に挙げたように、清末の家塾で『幼学故事瓊林』や『日記故事』が四書の後に読まれたのは、どのような読書環境で『日記故事』が読まれていたかを

表している。

李鴻章の幕僚周馥は代々の農家で中上の家庭に生まれ、四、五歳の時、祖父から手ほどきをうけ四書を全部読んだ。その後八歳になって塾に入り、夜には祖父から孝悌の故事を聞かされたという。[63]『日記故事』とはまさしくこのような用途に相応しいものであって、明末には『演説日記故事』[64]などというものも版刻されていたということは白話による読者層を想定したものであろう。白話で講解されることは、講唱文学と同様に、文言による士人のための文章でなく、文白混交で庶民が庶民に説くというものになる。

田中謙二「旧支那に於ける児童の学塾生活」のいうように、『日記故事』が実際に主に書翰文作成の故事典故を学ぶものであったのか、それとも童蒙のためのものであったかについては、判断が分かれるところであるが、本質的に科挙受験とは関係のない者のためのものであったということは妥当だろう。先に挙げたように、清節堂の義塾の規定でも『日記故事』が啓蒙書として推奨されていた。もともと虞韶『小学日記故事』の序には、（楊億）楊文公家訓を引用して「黄香扇枕、陸績懐橘、叔敖陰徳、子路負米」など取り上げる故事が通俗のままであるが、古今を限らず「孝悌忠信、礼義廉恥」を重視して先において先人の言行を記す『日記故事』の童稚の学における効能を評価している。[65]

その点で『日記故事』はいわば啓蒙と挙業とのあいだにあった書で、明末に商人や援例監生などの識字には問題ないが文言は理解しがたい、いわば周辺的読書人ともいうべきもの増加に応じて需要が増えたともいえる。同様の性格のものに同じく明末に普及した日用類書や『雑字』を挙げることができるのではないか。日用類書はその中でも比較的高級なもので、商人が経済的に発展した時期に現れた。余象斗『三台萬用正宗』巻二一に商旅門があるということ、挿絵によく役人が描かれるのも理解できる。一方で、官僚世界での人間関係に役立つ項目を載せている

ことなどは大都市で生活する商人や官員に対する配慮ともいえる。大商人向けということであれば高級な体裁の日用類書が多く出版されるのも不思議ではない。

日用類書がもともと大都市の生活者、経済力を持った大商人や官僚を対象とするのなら、『雑字』は地方都市の、中小の商人を対象としたものではないか。もともと宋代の村塾で用いられていた『雑字』は、明末には様々な種類が作られて多様な記載を加えられるようになったようだ。識字に役立て、それを発展させるようなものとして『雑字』は編集された。『雑字』にも「天文門、地理門」といった類書的な分類をされた語釈があり、この一冊で全てをまかなうというものだった。だからこそ、現存するものは限られているが、何種類も版刻された。このようにして、字塊に類した文字を附した図や、「小児論」、千字文に『百家姓』、九九、「山墳禁約」や「同本合約」といった契約の見本、歴代国号歌というような雑多な内容を持つもの（『東園雑字大全』）も生まれた。「往来帖式」といった手紙の書き方の指南まで加えられているのは、商人は書信を書ければよいということであっても、その手本となるものがあれば重宝するためである。なかには『新鐫増補類纂摘要鰲頭雑字』（内閣文庫二七八―二一四）のように、福建から北京までの路程を載せるものまで存在した。

明末に現れた『雑字』はどう見ても、全くの子ども向けでもないが、語釈はあっても図に音註をつけて文字と事物とを対応させるところなどは、読書人向けとは思えない。経書の暗誦や典故に関係があるようには見えず、受験対策に役立てるものとも思われない。それに対し清末の同文堂刊の『六言雑字』（封面題）[66]には、「不做挙業大事、也習雑字専心」とあり、科挙に向かわない世界での初等教育を対象とすることがわかる。

そして、『新鐫卓吾先生通考指掌雑字』一巻（習善堂刊本、東京大学東洋文化研究所所蔵）のように、李卓吾の名を題名に掲げるのはどう見ても挙業書とはいえまい。『増補素翁指掌雑著全集』不分巻、『卓吾李先生校士民切要

帖式手鏡』不分巻（CHINOIS：7706）、封面題「新増補李卓吾／註釈素翁雑字／併刊延賓帖式」というような李卓吾の名を冠する実用書が存在する一方で、李卓吾の評釈ということを大々的に銘打ったものといえば白話文学である。『三国演義』や『水滸伝』、『西廂記』などに、李卓吾の批評が加えられ、その名が後々まで消えなかったのは、文言ではなく白話の世界で支持されたからであろう。商人が「能写帳目、書信就可行」といって識字能力の必要性をうたうとき、白話文学の盛行の陰に白話の読者の分厚い存在を想定させる。文字は知っていて書信は書くことができるが、文言（古文）はつづれないという教育の水準を想定することも難しくないだろう。

結語——知識の階層性

旧中国では初等教育には二種類あったといえる。士人を対象とする科挙受験を目的とする挙業につながるものと識字教育で修了するものである。清末の武訓の作った義塾も経・蒙の二つの班に分けていたのは[67]、一般の私塾の教育内容も蒙学のみではないということを示しているのではないか。劉禺生『世載堂雑憶』清代之科挙は「蒙学で授けたのは識字に過ぎず、読み書きができれば工商の用に便利というだけであって、ほぼいまの初級小学のようなものである。児童が科挙に応ずる志があれば、長じて挙業の勉強をするが、その教師には多くは秀才を招いてこれに任ずる」と述べて、識字と挙業の二重構造を指摘している[68]。科挙受験を目的とする教育は個別になされたり家塾でおこなわれた。

時には呉虞の夫人曾蘭[69]や馮友蘭の家塾のように家によっては女児に対しても教育が行なわれたこともあった。『紅楼夢』第二回にも、賈雨村が塩政の女児林黛玉を教える話が記されている。羅汝芳『羅明徳公文集』巻四、臨

川傅母官孺人墓誌銘には、[70]

孺人為邑南洪塘官聲亮女、生平性温而敏、父授以小学諸書、即稍知大義、至誦二十四孝詩、則喋喋夜分不置、笄歸傅公、序執婦道甚謹。事祖姑與姑、咸盡誠款。

とあり、成化年間の江西で『小学』など啓蒙書を父親から授かり「二十四孝詩」を誦えるに至ったという官氏の年少の頃の姿が記されている。胡適の大嫂は嫁入りの時に『双珠鳳』の類の弾詞小説を何種類も持ってきたし、二哥の丈母は字がよく読め『玉曆鈔伝』や『妙荘王経』などの善書を持ってきて、いつも胡適たちに目連救母や観音出家などの話を語り聞かせたという（『四十自述』一、九年的家郷教育）。先に挙げた盛氏が「平生書を喜ぶ、然れども独り仏書を喜ばず」と記されたのも、逆に家庭内で仏書を読む婦人が少なくなかったことを暗示している。実際に清末の徽州の胡適の家では、二哥の丈母がいくつもの善書を語り聞かせていた。清節堂に入った女性で、旧家の婦人は字が読めるが、小説は禁止されて読んでよいのは善書のみであったというのも、[71]旧家の家庭では小説を読むことが珍しくなかったということができる。

それらの知識のある婦人のなかには、家塾ではないが、蘇軾や顧炎武の母親のように自身で子どもに教育を施す例もあった。[72]王独清の継母の閻氏は知県の娘であったと記されるが、『漢書』や『三国志』の一節を暗誦し、詩の才能も豊かで父親のおびただしい手紙の代筆をしたという。[73]父の死後、この義母が王独清に対する教育方針を変えて、まず経書をきちんと勉強させたいといって、四書五経以外の書物にふれることを許さず、父から許されて読んでいた書物をすっかり没収し、作詩・作文・絵画を禁止したとあるのは母親自身の受けてきた教育の内容と学問観を語っていて示唆的である。

一方、私塾でおこなわれた童蒙に対する啓蒙教育には多くの書生が関与していた。多くの書生が私塾を開き、苦

しいながらも口に糊することが可能であったのは、とにかく暗誦を強制すればよいという一定のスタイルが存在したからである。テキストや机、椅子は生徒の自弁であるから、場所さえ確保されればよい。場所は姚廷遴のように自宅でもよいが寺廟を借りることもあった。『儒林外史』第二回では、観音堂を教場にして、一年の報酬は銀十二両、毎日銀二分で食事がつくとある。また、羅信耀『北京風俗大全』（一九七頁）も、小禿児の行くことになる雍先生の私塾が「家の胡同のすぐ向こうの土地廟の境内」というように設定している。[74] そして、馬叙倫を教えた劉題のように医師が塾師となることは、『乱離見聞録』の陳舜系もそうであったように、よく見られたことだったのではないか。ただし、『乱離見聞録』や『歴年記』では、医者に読み書きを習ったその際には、名前あるいは号を直書するだけで某先生とは称していない。[75] さすがに民国三十六年に記された馬叙倫の自伝では劉先生とされているが、明末の読書人の感覚では、医者は読書人ではなく師とは見做さないのであろう。[76]

塾師の教える生徒の数が二十名ほどで五年間教えるとして、一人の塾師が一世代二十年間教えたとすれば、おおむね八十人の生徒に教えたと想定できる。実際には、「大抵一二年、三五年、即罷業、四書多不能竟読」[77]という状態であったろうから、文字を聞きかじっただけのものはもっと多くいただろう。顧炎武『亭林文集』巻一、生員論では「合天下之生員、県以三百計、不下五十万人」として生員を約五十万人と概算するが、塾師は生員の数よりは多いと思われ、さらにその周辺に識字教育を受ける児童が多数存在しただろう。陳鶴琴の住んだ百官鎮にも二哥の老師王星泉以外にも塾師は存在したわけだし、二哥が書館を開いた時には、三十人足らずの近所の子どもが来たという。[78] また、子どもを私塾にやる家庭の親は全く文字が読めないかというと、そんなこともありそうにないので、一つの県城に塾師がどれくらいいたかを想定すれば、家塾を別にしても意外に識字層の底辺は広いのではないか。識字や算数といった商人の知識というものは必要なのであって、一定程度の読み書きは不可欠である。その全てが

豊かな消費生活を送っていたとはいえないが、都市に限れば案外に大きな数の識字層が存在していたといってよいだろう。

広東で『花箋記』のような木魚書が粗悪な印刷、製本で売られていたということは、粗悪ななりに受容されたわけであり、ごく身近な娯楽として読む人々が存在したのであろう。十九世紀の西洋画にみえる広東の木魚書売りや、賃書の小商いの図は、街頭に売り歩く小規模な販売形態を表しており、街角で書物に関係しながら生計を立てていた人々がいたことがわかる。[79] 顧客となっていたのは、必ずしも学があるとは表現されなかった人々であろうし、女性の読者の存在も表面には現れにくいものである。

先に挙げた陳氏三世傳略にみえる陳際泰は、子どもの頃に『三国演義』の全相本をみていて食事も忘れて読みふけり母親にしかられて、絵を見ているんじゃないもん、絵の下の字を読んでいるんだもんといっていた。母親にいわせると全相本は図を見るものであったわけだが、白話で記された小説はある程度文字を識れば理解可能なものだったのだろう。黄宗羲も北京にいた天啓三年（一六二三）十四歳の頃、ひそかに小説を買って読んでいた。[80] ある小説は全相本で図をみるものとして普及していただろうし、また子どもでも買える程度の価格の小説もあったということである。そうであれば決して高価なものとも限らず、浸透する範囲も拡大していただろう。

また、清末のプロテスタント布教で翻訳された聖書その他には文言だけでなく口語が多く用いられている。[81] 宣教師がまず学んだのが白話であったということもあろうが、明末のイエズス会とは異なって既に東南アジアやマカオでの活動を通じて庶民と接しており、読書人ではなく実際に庶民を直接の対象としてつくられたからではないか。各地の方言による聖書の翻訳が多数存在しているのも布教対象の差違を示している。

泰州学派の王艮を表現するのによく言われるのが李卓吾のいった「一丁字も識らず」ということであるが、[82] 果た

して文字通りの塩業労働者であったのだろうか。『明儒学案』巻三十二、泰州学案には、七歳で郷塾に行き学問を始めたが貧しくして畢えられなかったといい、父親に従い山東に行って商売を営んだ。父親は商売に必要な読み書きは当然身につけていたはずである。王艮自身も『孝経』・『論語』・『大学』を懐中に持ち歩き疑問点を人に質したという。[83] 以上は、全くの無学な塩田労働者であったことを示す表現というよりは、先に挙げた陳際泰の父親がそうであったように、むしろ初等教育の読み書きは身につけたが、それ以上の学問つまりは科挙への道をすすみえなかったことを表すのではないか。

一八八五年、湖北省東部の黄州に生まれた熊十力の家は代々貧乏な百姓で、祖父は田舎大工、父は発憤して勉強し生員に合格、塾師などをしていたが貧乏に苦しんでいた。十歳の頃、熊十力もよその家の牛の番をして家計を助けた。父は熊十力の素質を知って、病をおして黄州の街で塾を開き十力を伴って行って勉強させる。まず、『三字経』を授けられたが一日で暗誦してしまい、次に四書を授けられたという。そして、十一歳の秋に、早くも八股文を作った。十二歳（一八九六年）の秋、父が亡くなった。長兄は貧乏のため十五歳で勉強をやめ百姓になったという。[84] 熊十力は貧しくして学を修められなかったが、はじめは科挙を目指していたような表現である。この場合、父から庭訓を受けること三年になるが、学を修了することはできなかったといわざるを得ない。

朱徳の記憶する清末の旅の職人たちは大きな都市からくるのであり、農民よりはずっと開けており、あるものは読み書きもできた。彼らは仕事をする家に泊まり、その家のものは彼らから話を聞こうとしたという（『偉大なる道』上四二頁）。また、農民は息子を一年か二年かは塾にやるかもしれないが、田んぼで働けるようになればすぐに、呼びもどされたとしている（同六六頁）。表現のあやで「一丁字も識らず」と記されたような人々の間にも一定の識字能力があったことであろう。王振忠『徽州社会文化史探微』の引用する光緒初めと推定される汪鶴卿の手

紙（三二六頁）は、蘇州の綢緞商で働く学徒（徒弟）でも充分に読み書きをして、商況の情報を伝えていたことを示している。福沢諭吉の最初の出版物『増訂華英通語』の藍本は、一八六〇年（万延元年）にサンフランシスコで清の商人から手に入れたもので、広東語の商用英会話集であった。[85] 広東で商人が取引に用いたり華僑が海外に携えたりしたもので、決して読書人を対象にしたものではない。

ここで『乱離見聞録』にもどってみれば、後の道教や風水に関係した書物は詳しく述べるのに比べて、他家の家塾に行った啓蒙期のテキストについては触れるところがない。四書を読むくらいは当たり前すぎて書かなかったのかもしれないが、逆に記述がないのは科挙向けの課程を踏んではいなかったために記さなかったのではないか、とも考えられる。近年、白話小説の読者については士人層や生員の動きも重視されている。[86] 胡適の族叔の近仁（胡董人）も十代で秀才となり小説の類をたくさん読んでいたが、昔風の碑伝文であれば記載されなかっただろう。伝記や年譜の類でよく記されるのはやはり経書であることを想起すれば、『三国演義』や『日記故事』などは、たとえ読んでいたにせよ、人の目に触れることを考えれば、かえって書くに値しないことなのであろう。

啓蒙書の具体像も個々の読書の履歴を考察することでより明確な像を結ぶことができるのではないか。士人の蔵書目録や文集の序跋を見ても、識字教育の過程で読み継がれたものと挙業に向けて読まれるものとの階層性の落差は簡単に表面には現れない。古くから『千字文』や『三字経』、『百家姓』はほぼ変化することなく読み継がれてきた。しかし、『雑字』や『日記故事』のように変化しながら版を重ねて受容されてきたものも少なくない。現代に伝えられているものは『小学』や『日記故事』のような朱子学的な背景をもったものである。金が滅ぼされ華北に流行していたものは元代までに途絶えたのかもしれないが、『千字文』や『三字経』、『百家姓』さらには「小児論」までが今に伝えられるのに対し、『兎園冊府』や『太公家教』がいつのまにか歴史の彼方に埋もれてしまったのは、

やはりその内容が初歩とはいえ、もともと読書人の子弟向けの教育課程を為すものであったからではないか。「兎園冊は乃ち（六朝時代の）徐（陵）・庾（信）の文體にして、鄙朴の談にあらず」とされた『兎園冊府』は、朱子学の時代になって四書が重視されることにより、時代の変化に対応できなくなったといえよう。それに対し、『蒙求』は故事の書として受け継がれて『純正蒙求』なども生み出されている。より通俗的な内容とおぼしき『雑字』は時代に応じて変化を重ねたものが現存し、内容は変化したがその名を今に留めている。

誰もが知っているがまず士大夫の文章には現れてこないという「二十四孝」の階層性については先に考察したことがあるが、記載されている書物によって「二十四孝」の内容が異なるということが見られた。[87] 例えば、詩文の作成にもちいる辞学のための類書にみえる孝の項目、『天中記』巻二十四、孝や『故事白眉』巻二、人道部、孝養類などには「二十四孝」と共通するものがほとんど無いこと、明末以降主流となっている『日記故事』系「二十四孝」は、日用類書の人物門の項目に見える「二十四孝」と異なっているのに対して、年画や通書の「二十四孝」とは共通すること、といったことなどである。同様に科挙を意識する古典教育につながる階梯をすすむものと、識字教育を一段落させればそれですむレベルとの間にある階層性を意識せずに、読書人の伝記や年譜に見える事例を一般化して論じることは危ういのではないか。先に挙げた王独清の義母の場合も、貧しいが故にかえって階層性にとらわれている姿を示すものであろう。あからさまには語られず、記されることもなかったが、『雑字』や『日記故事』のような啓蒙書や家塾に見られる課程の相違といった制度の背後にこそ知識の階層性を支える無意識が存在していたといえよう。

注

(1) 熊秉眞『童年憶往』(麥田出版、二〇〇〇) 第三章

所引司馬光「居家雑儀」(八一頁)。

(2) 程端礼『程氏家塾讀書分年日程』三巻 (『四部叢刊』続編、子部)

(3) 金文京他訳『老吃大』(平凡社東洋文庫、二〇〇二) 第二話 (二七頁)。

(4) 『旧五代史』周書巻一二六、馮道伝。

(5) 童蒙書については、張志公『伝統語文教育教材論』(上海教育出版社、一九九二) が詳しい。

(6) 孫光憲『北夢瑣言』巻十九 (上海古籍出版社、一九八一) 一三四頁。

宰相馮道、形神庸陋、一旦為丞相、士人多竊笑之。劉岳與任贊偶語、見道行而復顧。贊曰、「新相回顧何也。」岳曰「定是忘持『兎園冊』来。」道之郷人在朝者、聞之告道、道因授岳秘書監、任贊授散騎常侍。北中村墅多以兎園冊教童蒙、以是譏之。然兎園冊乃徐・庾文體、非鄙朴之談。但家藏一本、人多賤之也。

また、楊士奇『東里文集』(中華書局、一九九八) 巻二一、陳孺人墓碣銘に、

孺人曰「学必務経術、毋徒挾兎園冊自足耳」

というのは、元末明初期に実際に用いられていたのか、一般のガイドブックを示す名辞としてあげているのかは不明であるが、兎園冊ごときのもので満足していてはならぬという否定的な評価として引かれている。

(7) 王明清『玉照新志』(上海古籍出版社、一九九一) 五六頁。

世伝『太公家教』、其言極浅陋鄙俚。然見之唐李習之文集、至以文中子為一律。観其中猶引周漢以来事、当是有唐村落間老校書為之。(中略) 如市井間所印『百家姓』、明清嘗詳攷之、似是両浙銭氏有国時、小民所著。

(8) 田中謙二「旧支那に於ける児童の学塾生活」。のち『田中謙二著作集』第二巻 (汲古書院、二〇〇〇) 所収。陳東原『国史旧聞』第三冊 (中華書局、二〇〇〇)

(9) 陸游『剣南詩稿』(上海古籍出版社、中国古典文学叢書、一九八五)

(10) 周壽昌『思益堂日札』巻九、村書 (中華書局、清代学術筆記叢刊、一九八七) 一七九頁。

俗伝『雑字』一書、猶古来急就、凡將遺意。以非通人所作、中多俗書里説、故不登著録家。其書首云、「天地古今、陰陽始終、歳時日月、春夏秋冬。」似仿梁千文為之、亦自分門類。其後則多紀市井物名。

(11) ストックホルムの東洋博物館遠東図書館に寄託されたスウェーデン王立図書館所蔵本『増補玉堂註釋雑字大全』(封面題「東園雑字大全」、下巻「増補幼学須知

雑字大全』）をはじめ、パリのフランス国立図書館BNF（嘉慶刊本 CHINOIS：7708、道光刊本 CHINOIS：7709）、台北の中央研究院歴史語言研究所などに、清末に至る各時期の同名の『東園雑字』が所蔵される。

(12) 他に、パリBNFには『増補素翁指掌雑著全集不分巻、卓吾李先生校士民切要帖式手鏡不分巻』（CHINOIS：7706）というものがあり、封面に「新増補李卓吾／註釈素翁雑字／併刊延賓帖式」巻末蓮牌木記には「崇禎新歳穀／旦呉起祥梓」とある。陳継儒の関わったもので「王百谷先生註釈、陳眉公先生選集」とあり、手紙の書き方や「小児論」などをとりこむのもある種の明末的スタイルを反映したものといえる。「萬寶幼学須知鼇頭雑字大全」と封面題は異なるが同名の『増補素翁指掌雑著全集』（封面「庚申孟秋文萃堂梓」康熙十九年（一六八〇）、十七葉上図に「清帽」がある）がドイツ、ウォルフェンビュッテル Wolfenbüttel のヘルツォーク・アウグスト図書館 Herzog August Bibliothek にある。「幼学須知」というかたちで種々の啓蒙書の内容を取り込もうという意図がうかがえる。

(13) 小林善文『中国近代教育の普及と改革に関する研究』（汲古書院、二〇〇二）二〇頁。

(14) 『明史資料叢刊』第三輯（江蘇人民出版社、一九八三）所収。

(15) 比較的早く紹介したものに謝国楨『増訂晩明史籍考』（上海古籍出版社、一九八一）がある。

(16) 孺人とあるので父が官職についていた可能性もあるが、ここでは一般的な尊称であろう。

(17) 光緒『呉川県志』巻七、人物伝（一六頁裏）。

陳景廉、字東海。〔居城西山嘴巷〕父舜系、刻苦自励好済人之急、著有『乱離見聞録』。景廉苦志好学、工文章、茂名余麟傑斉名。……康熙乙酉副榜、辛卯挙於郷、未仕卒。

(18) 『海篇』については、『五雑組』巻十三、事部一に

余観『海篇直音』中所載、視『説文』不啻百倍、蓋人以意増減之、無非字者、恐将来字学従此益淆乱矣。

また、

余謂古今伝記中難字固亦有限、而釈、道二蔵中、恐即遍観、未能尽識、至於近代『海篇直音』、偏傍上下類以意増竄而長之、無復窮極。

などとあり、科挙の受験には不可欠というべき字書の一つで、周弘祖『古今書刻』上編、内府にみえる。明末に数多く異版がつくられたようで、長澤規矩也『図解和漢印刷史』図録篇（汲古書院、一九七六）四九頁に、『新鐫陳太史纂訂海篇彙編全書』十九巻の書影が挙げられている。ハーバード燕京図書館に数種所蔵があり、『美国哈佛大学哈佛燕京図書館中文善本書志』

（上海辞書出版社、一九九九）には、『新校経史海篇直音』五巻（T5116/2538、p. 80）、『翰林重攷字義韻律大板海篇心鏡』二十巻、劉孔当撰、万暦二十四年、葉天熹刻本（T9305/4234、p. 81）の二つが著録されている。また、黄道周、鄭大郁輯『新刻洪武元韻勘正切字海篇群玉』二十巻が、『美国哈佛大学燕京図書館蔵中文善本彙刊』（広西師範大学出版社、二〇〇三）に収められている。その他に東京大学東洋文化研究所（大木文庫経部小学類）に『新校経史海篇直音』五巻があり、『北京大学図書館蔵古籍善本書目』経部、小学類、文字にかなり多くの明末の版がみえる。

(19) 元朱震亨撰『丹溪心法』五巻。

(20) 呉宣宗の補証では援例監生のように解釈しているが、『醒世恒言』第三六巻（『今古奇観』第二六巻）、蔡瑞虹忍辱報仇には、「三考吏」の名目を買って下級官吏になる路があるという。

原来紹興地方、慣做一項生意、凡有銭能幹的、便到京中買個三考吏名色、鑽謀好地方去做個佐貳官出来、俗名喚做「飛過海」。

また後述する馬叙倫の祖父は「三考出身」で清朝の京官となったという。

(21) 『東京大学東洋文化研究所漢籍分類目録』子部術数類、相宅相墓（五一二頁）に

『新編楊曾地理家傳心法捷訣一貫堪輿』八巻、唐世友輯

『元珠經鐵彈子』一巻、何令通撰

『元珠經玉彈子』一巻、耶律楚材撰

『重刊人子須知資孝地理心學統宗』八巻、徐善繼、徐善述同撰

『重鐫官板地理天機會元』三十五巻、徐之鎮輯

などがあり、また『故宮珍本叢刊』術数、相宅相墓（海南出版社、二〇〇〇）に、

『地理參贊玄機僊婆集』十二巻、張鳴鳳編

『地理啄玉斧巒頭歌括』四巻、徐之鎮、唐際雲輯、張九儀釋

というものが見える。

(22) 光緒『呉川縣志』巻五、宦績

海寇李魁奇連年犯限門、率兵赴敵、邑頼以免。著有『一貫堪輿』行世。遷知崖州、士民懐徳、立去思亭。

(23) 姚廷遴『歴年記』（『清代日記匯抄』所収、上海人民出版社、一九八二）。

(24) 岸本美緒『明清交替と江南社会』（東京大学出版会、一九九九）所収。

(25) 十年丁丑、十歳。是年二弟読『大学』起、先従楊虞卿家黄先生。

(26) 九年丙子、九歳。…従蔡淡然読『孟子』起。淡然系小児科名医蔡承泉之子也。

(27) 『地球韵言』は銭穆『八秩憶双親』(岳麓書社、一九八七)や郭沫若『私の幼年時代』にも読まれたことがみえる。

(28) 胡適『四十自述』・馬叙倫『我在六十歳以前』・陳鶴琴『我的半生』(岳麓書社、一九九八)及び馮友蘭『三松堂自序』(生活読書新知三聯書店、一九八四)をもとにした。

(29) 伊藤漱平訳『紅楼夢』上(平凡社、中国古典文学大系、一九六九)一二五頁。

(30) 島田虔次『新儒家哲学について—熊十力の哲学—』(『五四運動の研究』同朋舎、一九八七)。

(31) 小林善文『中国近代教育の普及と改革に関する研究』(汲古書院、二〇〇二)二七頁注三。

(32) 魯国堯「落英—早年読書生活的回想—」(『中国文学報』四四、四五、一九九二)。以下の魯国堯の家庭に関する記述は全てこの回想録によるが一々注記しない。

(33) 魯国堯「落英—早年読書生活的回想—」

我父親兄弟六人都上過私塾、按照当地的規矩、十五歳(当然是虚歳)外出学乖、就是学生意、到人家店裏做学徒、吃三年蘿蔔乾児飯、満師後才能做伙計、就是店員的意思。他們上学的時間不長、可是文化並不算低。

(34) 『明史』巻七八、食貨志、賦役、また『清史稿』巻一二〇、食貨志、戸口。

(35) 陳鶴琴前掲書、第二章、我的二哥。

到了十六歳、二哥〝成人〟了。星泉先生就対母親説道、「鶴聞現在成人了、可以設館収門生了。他年紀雖小、他的学問着実够了。你可以放心。」

(36) 夫馬進『中国善会善堂史研究』(同朋舎、一九九七)四三五頁。

(37) 馮友蘭は『幼学瓊林』を典故と詩作の言葉を学ぶために用いられたとするが、胡適の同学にも『幼学瓊林』を学ぶものがいて、胡適は彼らが読めない文字を教えて助けてやったという。(『四十自述』一、九年的家郷教育)

(38) 王振忠『徽州社会文化史探微』(上海社会科学院出版社、二〇〇二)第三章、啓蒙読物與商業書類、三三八頁。また、王振忠「徽州人編纂的一部商業啓蒙書—『日平常』抄本」(『史学月刊』二〇〇二—二)も併せて見られたい。

(39) 王振忠前注書(三三九頁)所引『鶴年家書摘録』(清末歙県南郷蔡塢里刊本)

吾自十歳念書、即懐念書上進之意、自十六歳粗知念書滋味、後因生意在蘇、未果己志。自父故後、亦屢信教吾弟在家多多念書、再来京歴練生意。……徐紹圃、潘味琴微言勧吾、能写帳目、書信就可行。

(40) 費成康主編『中国的家法族規』(上海社会科学院出

版社、一九九八）所引『鄭氏規範』

一、子弟年十六以上、許行冠礼。須能暗記四書一経正文、講説大義、方可行之。否則直至二十一歳。

(41) 王日根「明清東南家族文化発展與経済発展的互動」（『東南学術』二〇〇一―六）。

(42) 『中国的家法族規』『鎮海柏墅方氏重修宗譜』巻一三、師範堂義塾規則

一、塾中初学其書、以『三字経』、『弟子職』、『夏小正』、『鑒略』、『孝経』、朱子『小学』為善、次則『千字文』、『百家姓』、『神童詩』等、或其家沿習俗見、必欲読之、無妨聴焉。至此数種後、即応令読四子書。読四子書須先『論語』、次『三孟』、次『大学』、『中庸』、以其講解易明、得漸次深入也。此後五經、先『詩』、次『書』、次『易』、次『左伝』、次『礼記』。或将業商者、不復研経、則四子書之外、如『孝経』、朱子『小学』、『幼学瓊林』、倶不可不読。

一、塾中択少長者数人、毎日講『論語』或『孟子』一二章、否或講『小学』、『幼学』数行。其次『日記故事』亦可。人多則分作二隊進講。只在詳尽、不必過多。次日務令回講、不達者更為解析之。

(43) 『官箴書集成』第八冊（黄山書社、一九九七）所収。

(44) 光緒二十七年刊本『学堂日記故事図説』一巻（丹陽文星堂蔵版、上文下図本）の影印本が、『寶卷』初集（山西人民出版社、一九九四）第三十九册に収められ、同治七年の梁溪晦斎序と同年の帰安呉雲の序がある。

(45) 夫馬進『中国善会善堂史研究』（同朋舎、一九九七）第七章　清代の恤嫠会と清節堂、四二一頁、四四一頁。

(46) 夫馬進前掲書、第七章　杭州善挙連合体と都市行政、ギルドおよび国家、五五五頁。

(47) 馬叙倫注（28）『我在六十歳以前』

我的家境也決不能够請先生了、就進了一個宗文義塾、在智齋里従胡誦清先生読書。那時一齋里学生程度高的文章満篇、低的還只是背誦対課。

(48) 『四子書』（ストックホルム東洋博物館遠東図書館寄託の王立図書館所蔵本）

瑞熊帰自京師閉門課子。窃以入徳之門、首重四書、而読本不精、易滋沿悞。因與同邑林君儀、兼取坊行善本十有餘家、共相参考。丙戌春　家藜閣太史、又出閩本相示。宋刻雖佳、惟鋟行日久、間有模糊。恭遵／欽定字典、按其部画、詳其音切、識之簡端。両閲寒暑、始克告成。自維謭陋、不敢示人、刊蔵家塾。庶幾童蒙養正一助云爾。

(49) 呉昌熾『客窓閑話』（河北人民出版社、一九八五）一一三頁。

(50) アグネス・スメドレー『偉大なる道―朱徳の生涯とその時代―』上（阿部知二訳、岩波文庫、一九七七）六六頁。

(51) 陳継達『監察御史徐定超』(学林出版社、一九九七)

父勤学于郡城、祖望之甚切、歳末或農隙、令其伯叔更迭往視。大伯父未進学、而性最嗜学、対其父愛甚。父年三十始得庠生。

(52) 金文京「小説」(興膳宏編『中国文学を学ぶ人のために』世界思想社、一九九一)二二四頁。

(53) 『己吾集』巻八、陳氏三世傳略。

父西園先生、少随筆大父玉伯公、入閩武平、市平江布。公為人醇潔、自好工書、及五行之学。顧役生之路甚微、一歳所獲才数金耳。

(54) 同前注。

先生生平未嘗有師、在閩従群児、取糈自糊。暇時輒以其意尋繹五経、当其別解、都出人意表。泰往往能自得於蹊径之外、似有所本耳。

(55) 羅貫中編『残唐五代史演義伝』八巻、六十回本のことであろう。

(56) 謝肇淛『五雑組』巻一三、事部一。

余八、九歳即好観史書、至於乱離戦争之事、尤喜談之、目経数過、無不成誦、然塾師所授不過『編年節要』、『綱鑑要略』而已、後乃得『史記』、『漢書』及朱子『綱目』読之、凡三四過、然止於是而已。

(57) 詹家豪「明代太学中的援例監生」(『広東社会科学』二〇〇一—六)所引『続南雍志』巻三、隆慶三年正月乙丑。

所謂民生者、或曰発社生、或曰附学生、或曰附学名目、或曰俊秀、……其実皆白丁也。

(58) 長澤規矩也「元明編刊の故事集について」(『長澤規矩也著作集』第三巻、汲古書院、一九八三、原載『書誌学』一六—二、一九四一)。また『老吃大』第一〇四話に『君臣故事』が見える(三三七頁)。

(59) 『靜嘉堂文庫宋元版図録』(靜嘉堂文庫、一九九二、三〇頁)、宋元版史部五三、『歴代故事』嘉定五年序刊。なお楊次山については『宋史』巻四六五に伝がある。

(60) 葉盛『水東日記』巻十二、日記故事

故事書、坊印本行世頗多、而善本甚鮮、惟建安虞韶日記故事以為一主楊文公・朱晦庵先生之遺意。穎考叔輟羹遺母、不失純孝、未免昭君之過。鬻拳強諫以兵、可謂愛君、難逃陵上之非。王覽愛兄諫母、則陷於不慈。鄧攸存姪棄兒、則傷於少恩。凡矯枉害正之事、一切不取。又如楚王戊之醴酒忘設、邊孝先之晝眠見嘲、翟公之貴賤見交情、丁公之謁見受戮辱、事雖反正、亦足為來者之戒、各存本類之後。近歳襄城李公重刊此書、又為易生知為幼悟、且標目却去對偶、一以年代為先後、亦善矣。惜乎去取標目皆尚有未精純處、且不著事出某書某文。其間刪削亦不一、如内助得賢稱伊川兄弟、而戒無謾語却又稱先公等類、可知也。大抵此書與沈易五

倫詩同、雖較之他選、可謂彼善於此、而欲謂之當而備、則未也。

(61) 橋本草子「『日記故事』の版本について」(『人文論叢』四六、一九九八)

(62) 瞿中溶撰『二十四孝考』(台北、廣文書局影印、一九八一)

(63) 熊秉眞『童年憶往』(麥田出版、二〇〇〇)第三章、環境的堆砌與塑造一〇四頁所引の周馥『周愨慎公自訂年譜』(周愨慎公全集本、『中国歴代名人年譜彙編』第一輯、広文書局、一九七一)。

道光二十四年甲辰八歳

叔父光徵公抱入塾、従倪先生晉受業。功課疏懈晩帰、祖父課読、読罷、講孝弟数事、夜分乃罷。至十二歳、日以為常。

(64) フランス国立図書館所蔵『新増註釈演説二十四孝故事』五巻(CHINOIS:3287)、巻二の題には「新註便蒙演説日記故事」とある。

(65) 嘉靖二十一年熊大木刊本が『中国古代版画叢刊』第一集(上海古籍出版社、一九八八)に収められる。なお、橋本前注論文が蓬左文庫本を紹介している。

楊文公家訓有曰、童稚之学、不止記誦。養其良知良能、当以先人之言為主。『日記故事』不拘今古、必先以孝悌忠信、礼義廉恥等事。如黄香扇枕、陸績懐橘、叔敖陰徳、子路負米之類、只如俗説、便暁此道理。久久成熟、徳性若自然矣。

(66) ストックホルムの東洋博物館遠東図書館寄託のスウェーデン王立図書館所蔵本。

(67) 周抜夫「武訓先生年譜」(張明主編『武訓研究資料大全』山東大学出版社、一九九一)光緒十四年戊子(六七頁)。

(68) 大木康『明末のはぐれ知識人—馮夢龍と蘇州文化—』(講談社、一九九五)一七五頁所引。

(69) 呉虞「曽香祖夫人小伝」(『呉虞集』四川人民出版社、一九八五)、呉虞が妻の曽蘭のことを記した「曽香祖夫人小伝」には、曽蘭が幼くして家塾に入り『論語』を授けられたとある。

(70) Yu-Yin Cheng "Selected Writings by Luo Rufang" *Under Confucian eyes: writings on gender in Chinese history*, edited by Susan Mann and Yu-Yin Cheng. University of California Press. 2001 の紹介する羅汝芳『羅明徳公文集』五巻、内閣文庫藏明崇禎五年(一六三二)序刊本。

(71) 夫馬進『中国善会善堂史研究』(同朋舎、一九九七)四四五頁。

(72) 謝国楨『顧寧人学譜』(商務印書館、一九七三)に、寧人幼時、母王氏授以『小学』、紡績之暇、尤好観『史記』・『通鑑』、及明代政紀諸書、而劉文成、方忠烈、于忠粛諸人事。自寧人十余歳時即挙以教。

年十一歳祖蠡源公即授之以温公『資治通鑑』。

とあるのは特殊な例であろうが、知識人の家で女性がかなり高度な教育を受けていたことがあったのはいうまでもない。

(73) 王独清『長安城中の少年』(田中謙二訳、平凡社東洋文庫、一九六五) 六九頁

(74) 稲田孝訳『儒林外史』(平凡社、中国古典文学大系、一九六八) 第二回。魯迅『阿Q正伝』で阿Qが住んでいたのは土穀祠で、土地廟の空いた建物を私塾にするくらいのことはごく普通にありえただろう。淫祠を毀して社学を建てたというような記述(『明史』巻一九七、霍韜や巻二一三、徐階など)も考えれば同様のことなのだろう。現代の大陸でもそうだが寺廟を学校にした例は少なくない。

(75) 『乱離見聞録』丙子崇禎九年

時徽州吏目程立行祖業医、長公向用之。予礼為師、彼命看『丹溪心法』・『立齋医案』。

また注(25)『歴年記』(崇禎) 九年丙子、九歳。

(76) 趙翼『陔余叢考』巻四二、九儒十丐には「一官二吏三僧四道五医六工七猟八民九儒十丐」という言葉が見えるが、医師は宗教者や工匠と一まとめにされていたともいえる。

(77) 『得一録』巻十之五、変通小学義塾章程、訓蒙記事。

(78) 陳鶴琴『我的半生』第二章、我的二哥。

但上無伯叔為之提携、中無親友為之援手、不得已于光緒二十二年(一八九九年) 八月在家中客庁設館教書了。隣近的児童一聴見二哥教書了、就大家争先恐後的来上学。第一天開学時就有三十来個学生。

(79) 黄時鑒・沙進編著『十九世紀中国市井風情—三百六十行』(上海古籍出版社、一九九九)

(80) 黄炳垕『黄宗羲年譜』(中華書局、一九九三) また、井上進『中国出版文化史』(名古屋大学出版会、二〇〇二) 三四一頁。

(81) 聖書などの方言訳については、游汝傑『西洋伝教士漢語方言学著作書目考述』(黒竜江教育出版社、二〇〇二) を参照。

(82) 李贄『焚書』巻二、為黄安二上人三首、大孝一首

心斎本一灶丁也、目不識一丁、聞人読書、便自悟性、径往江西見王都堂、欲與之辯質所悟。

(83) 黄宗羲『明儒学案』巻三二、泰州学案

王艮字汝止、號心齋、泰州之安豐場人。七歳受書郷塾、貧不能竟学。従父商於山東、常銜『孝經』・『論語』・『大学』袖中、逢人質難、久而信口談解、如或啓之。

なお、王艮(王心齋) については、森紀子『転換期における中国儒教運動』(京都大学学術出版会、二〇〇五) 第三章 泰州学派の形成を参照されたい。

(84) 島田虔次『新儒家哲学について―熊十力の哲学―』(同朋舎、一九八七)

(85) 『華英通語』については、矢放昭文「『華英通語』の価値について」(『東方』二八五、二〇〇四)を参照。文言と白話の分化という点からみれば、広東語にのみ用いられる漢字が存在するのも、文言ではなく白話の文字化が為されたからだと理解されよう。

(86) 大木康「明末における白話小説の作者と読者について」(『明代史研究』一二、一九八四)、同『明末のはぐれ知識人―馮夢龍と蘇州文化―』(講談社、一九九五)。磯部彰『『西遊記』受容史の研究』(多賀出版、一九九五)など。

(87) 大澤顯浩「明代出版文化中的「二十四孝」―論孝子形象的建立與發展―」(『明代研究通訊』第五期、二〇〇二)

〔附記〕 本稿は学習院大学東洋文化研究所二〇〇一―二〇〇二年度研究プロジェクト「中国前近代の知識人の存在形態」の研究成果の一部である。

The cultural difference in late imperial China

OSAWA Akihiro

Key words: primary literacy, private school, *Luanlijianwenlu* 乱離見聞録, *Rijigushi* 日記故事, *Zazi* 雑字

In historical materials common people, excepting the literati, were often described as uneducated or uncultured. But it can be observed that many people, including merchants and farmers, learned elementary textbooks by heart in private schools, sometime even SiShu 四書 *The Four Books*. Especially in the cities of those times, the learning of *SiShu* was widespread beyond expectation. In pre-modern China there was a certain assumption of the primary education that the most essential thing was to memorize the texts of *SiShu*. However, the pre-modern primary education consisted of two courses. One was the first step that led to passing Keju 科挙, the imperial examination to become a bureaucrat. The other had the purpose of helping students attain primary literacy. The textbooks of the two courses were not the same. The children of commoners started their study by reading elementary textbooks, and they read *SiShu*, or *Rijigushi* 日記故事 etc, until the age of 14 or 15. On the other hand, children of the literati skipped some kinds of elementary textbooks, and they studied how to make poems and other Chinese classics further and deeper. The difference of knowledge that was made from the two types of textbooks for literati and the populace is the reason for the cultural attitude in late imperial China.